

台湾／林佳龍

— 民主化の旗手の現在地 —

佐藤 幸人

林佳龍は2014年、台湾中部の中心都市、人口約270万人を抱える台中市の市長に当選した。林は1964年生まれ、まだ50代前半と若く、今後、さらなる活躍が期待される。

●民主化をリードしたエリート

林が国立台湾大学政治学系（「系」は学部あるいは学科）に入学した1980年代、台湾では民主化への胎動が始まっていた。大学においても中国国民党政権の権威主義体制に対抗する、自主的な学生運動が生まれ、林はリーダーの一人となった。林は学業にも秀で、台湾の反体制運動について優れた論考を発表している。

筆者は1990年代初め、台湾大学に留学していたとき、政治学研究所の修士課程にいた佐藤将之さん（現在、国立台湾大学哲学系教授）の紹介で林と知り合った。林の自負心に溢れた態度は、今でも鮮明に記憶している。将来、政治家になるために政治学専攻を選んだという言葉が印象的だった。

林は台湾大学で修士課程まで終わると、アメリカのイエール大学に留学し、高名なホアン・リンスに師事した。学位取得後、国連大学の研究員として1年弱、日本に滞在している。『アジ研ワールド・トレンド』1998年10月号の特集「台湾——せめぎあうアイデンティティ——」では、東京にいた林をつかまえて筆者らが行ったインタビューを掲載している。場所は新宿駅南口近くのレストランだったと思う。林の妻の廖婉如も一緒だった。台湾人のアイデンティティが強烈なのは、「最後のYES/NOという権利が欲しいから」という林の説明は、今、いっそうの説得力を持つ。

●挫折にめげず捲土重来を果たす

林は1999年に台湾に戻ると、はじめ嘉義県にある国立中正大学で教壇に立ったが、民主進歩党政権が成立すると政界に転じた。2000年から総統府の国家安全会議の諮詢委員をつとめた後、2003年に行政院（内閣）のスポークスマンになり、2004年から新聞局長になっ



（提供）クリエイティブコモンズ（photo by 大瑋邱）

た（新聞局はメディアにかんする官庁。現在は廃止）。順風満帆にみえた林の政治家人生だったが、民進党の退潮のなかでいったん挫折を味わうことになった。2005年、台中市長選挙に立候補した林は、国民党の現職候補、胡志強に惨敗した。

しかし、林は敗れた後も台中を去らず、むしろ根を下ろして地道な政治活動を続けた。林はエリート中のエリートであるとともに、苦渋の日々に耐える頑強な精神も持ち合わせていたのである。妻の廖は奇美グループ創業者の許文龍の姪という裕福な家の出だが、この間、林を支え続けた。その甲斐あって2012年の立法委員（国会議員）選挙で国民党候補を破って当選し、2014年には一度は敗れた胡から台中市長の座を奪取したのである。

台湾では北部では国民党が強く、南部では民進党が強い。畢竟、中部をどちらが制するかが非常に重要となる。それゆえ、林の勝利の意義は大きく、2016年の総統選挙で蔡英文を格段に有利にした。

台中という兵家必争の地の市長となった林は、将来の総統の有力候補の一人に躍り出た。とはいえ、蔡の後継者としては台南市長の頼清徳が最も有力視されている。林もそれをわかっているのだろう、今は市政に励んでいる。その実績で4歳年上の頼にどこまで迫れるか、注目していきたい。

（さとう ゆきひと／アジア経済研究所 新領域研究センター）